

日付:2014年9月7日／聖書:詩編62:1～13

主題:「力は神のもの」

今朝の詩編は、人がどうしても頼りにしたい「力」に対して、「力は神のものである」という。「主の祈り」にも、「国と力と栄とは、限りなく汝のものなればなり」と結ぶ。「力は神のものである」と主の祈りでもそう記されているが、しかしこの世は、力あるものがこの世を支配し、力あるものが人として認められる世界である。武力、財力、学力、…その「力」を行使し、用いることで人の上に立ち、他の人間を支配しようとする。

この詩編の作者はイスラエル国王のダビデである。国を治める王が、「暴力に依存するな。力が力を生むことに心奪われるな…力は神のもの」と言い切ることは、たいへん勇気のいることであつたかと思う。時の王様であれば、「力は王のもの、私のもので」と言ってもおかしくはない。ダビデは、しっかりと神を見あげる信仰があつたがゆえにこの言葉が生み出されたのであろう。

《ひとつのことを神は語り／ふたつのことをわたしは聞いた／力は神のものであり、慈しみは、わたしの主よ、あなたのものである…。》(詩編 62:12,13)それはまた、イエス・キリストの姿に置き換えてもいいかと思う。イエスは、暴力的な支配者となるよりも、むしろ苦難のしもべとなることを選ばれた。武力によって勝ち取った正義よりも、死に至るまでの慈しみを私たちに現してくださった。キリストのお姿を見る時、如何に暴力的なものが、神とかけ離れたものであるかを知らされる。あの十字架と復活の出来事に、神の力を見、神の慈しみを見ていきたい。

フィリピの信徒への手紙2章に《キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。》人が上に、上にと這い上がろうとする中で、神が下に、下にと降りてくださっているところを見逃してはいけない。そこに、神の力、神の慈しみがある。(神谷)